
喫茶「アガルト」

骸炭

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

喫茶「アガルト」

【Zコード】

Z0504F

【作者名】

骸炭

【あらすじ】

自家製コーヒーを売りにする喫茶店「アガルト」。今日はどんな客がくるのだろうか？

(前書き)

ふと毎こつもで書いてみました。

昔は教師をやっていたというしゃれた老人がマスターの小さな喫茶店「アガルト」。売りは自家栽培の豆を中心としたコーヒー。メニューには偶つこにマイブレンドとすまなそうに書かれている。

「からーん。からーん。」

と遅つたような鈴の音がし、小さなドアが開いた。どうやら客が来たようだ。

「いらっしゃいませ。」

ほんとに元教師だったのかと疑いたくなるような小さな声で声をかける。それでも十分お客には聞こえたようだ。

「マイブレンドをお願いします。」

「かしこまりました。」

そうこうでマスターは、カウンターの後ろに消えていった。
客はどうとその姿を少しおった後、すこし周りを見渡した。気に入つた席が見つかったのか一番奥にあるテーブル席へ腰を下ろした。そしてかばんを開け小さな文庫サイズの本を取り出し、ページを開くとなにやら書き込み始めた。

「月×日 念願だつた実験をついに始めることができた。この実験によつて自分の研究が否定されたとしても、証明されたとしても、この地を中心に世界は変わるだろう。」

つづきをどうするか悩んでいると、コーヒー豆が入った小さな袋を数個抱えてマスターがカウンターに戻ってきた。そしてそれぞれの袋の中から豆を少量ずつ図りながら取り出し、「コーヒーミルのなかに入れていく。それを何度もくりかえし必要な量がそろつたことを確認すると、おもむろにコーヒーミルの取っ手をゆっくりをリズムを刻むようにまわしていく。

「がりがり、がりがり、がりがり・・・。」

「じゅうせよ今日は大切な日となるだらつ。歴史に汚点と残されるのか、」

「コーヒー ミルが奏でる音に聞き入りながら彼は文章を綴つていいく。

「それとも輝かしい日として残るのだろうか。」

そこまで書くと次のページをめくる。

急に何かを思い出したように、渋い顔になりペン先を見つめてしまった。

「がりがり、がりがり、がりがり・・・。」

書き綴るペンが止まつても音は同じリズムを刻み続けていく。

「がりがり、がりがり。」

ゆっくりと確実に音が小さくなり最後に音が止まつた。
豆を引き終わったのだから、コーヒー ミルの下から引かれた豆を取り出しあげた。

そしてどこからかサイフォンを取り出し、上部の中に引いた豆をいれ、サイフォンを二つに分けたまま、またカウンターの後ろに消えていった。

ふと、ロービーミルの音が止まっているのに彼は氣づきふと我に返り、またペンを動かし始めた。

「願わくば、命を奪うことなく、守る存在となつことを。そして永遠に。」

そう綴ると一回手を止めた。

それを待っていたかのように、手にランプと水差しを持ったマスターが表に出てきた。

「トシ」

と小さな音を立ててランプをサイフォンの近くに置くと水差しからサイフォン下部にゅつくりと丁寧に注いでいく。必要な量がたまると手を止め、今度は音を立てないように水差しをカウンターに置いた。

「・・・。」

無音のときがその場を支配した。そしてマスターは静かに息を吐き出し、サイフォンのおいてある場所から離れたところにある蠟燭のある側に向かっていった。

おもむろにポケットからマッチを取り出し、それを使って蠟燭に暖かな火をともした。火が落ち着いたのを確認すると蠟燭たてを持ち、サイフォンのところに戻つていく。

「はー」

彼はため息を漏らし、今度は蠅燭の火を田で追いかけた。まるでそれに魅入られたように。

「ぱつ」

サイフォンの隣にあつたランプに蠅燭から火が移され力強く燃えている。そして、ランプは何の迷いもないよう先ほど水を入れたサイフォン下部の下に静かに置かれた。

「シユ。」

蠅燭の火が静かに消され、もとあつた場所に戻されていった。

彼は蠅燭が元の場所に戻ったのを見届けると今度は、ランプの火に魅入られるのであった。

「ポ」「・・・ポ」「

水のが温まってきたのか、沸騰し始める音が聞こえ始める。マスターは一旦ランプをサイフォン下部から取り出すと今度はサイフォンの片割れである上部を取り、上部と下部を組み合わせた。そして目で確かめた後、ランプの火の大きさを調整し、組み立てたサイフォンの下にランプを入れる。

「ポコポコポ」「

再び沸騰が始まると下部にあつた水が漏斗の管を登つていき上部に広がっていく。

マスターはへらを取り出し、水が上ってきた上部をゆづくじと丁寧

に軽く攪拌した。

へらを置き、こんどは戸棚から飾りが一切ない真っ白なソーサーとカップを取り出し、どこからか持つてきたお湯をカップに注いだ。

「ポロポロポロ・・・」

サイフォンを見つめながら、シルバーを磨いていたふマスターが、ふと静かにランプの火を遠ざけ、そして静かに火を消した。

「すー。」

ゆうぐりとシフォン上部から下部にコーヒーの色をした水が降りてくる。

程よくおつきつたところで、マスターは上部をはずし、カウンターの脇にはずす。先ほど白いカップに入れたお湯を捨て、カウンターの真ん中に置くと、サイフォンの下部をもひ、黒く輝くコーヒーをカップに丁寧に注いでいく。

入れ終えると漆黒のトレイにおいてあるソーサーの脇に静かに置いた。シルバーをソーサーにセットし、トレイに白い小さな容器が二つ載った皿を載せ、トレイを持ち歩き始めた。

「おまたせしました。」

簡単に一言。そしてトレイからソーサーをテーブルに置き、そしてその上にコーヒーが入ったカップを置き、コーヒーに波紋がなくなったことを確認すると先ほどの容器が載ったお皿を静かに置く。ゆっくりとした動作でありながら、じれったさを感じず、むしろ儀式の締めくくりを思わせるようであった。

一礼した後、マスターはカウンターの中へと戻つていった。

「力チ」

彼はカップを持ち上げるとき小さな音を立てた。そして一口いれた。

「。。。。」

そしてゆっくりと、音を立てずにカップをソーサーの上に置いた。ふと思いついたように、先ほどまで書いていたページを開いた。

「ビコ。ビコビコ。」

音を立てて、そのページを破いてしまった。

「ふー」

と小さなため息を吐き、なきか決心したように破かれた後新たに開かれたページにペンをはしらせた。

「月×日 念願だつた実験をついに始める。この実験によつて確実に世界は変わるだろつ。魔法と科学相反するものの間に生まれたそれに、悲しみをうむ道に行かぬようしつかりと導くため、今日といつこの日を新たなる始まりとしよう。」

彼はペンを止めた。そして、ひとつの決断をした顔になり、明るいオーラがこじみ出でていた。

「。。。

しづらいくじて

「カラーンカラーン。」

鮮やかな音をしながら小さな扉はしまるのだった。

(後書き)

「一ヒーにふとすべくわれる最近です。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとっています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n0504f/>

喫茶「アガルト」

2010年12月21日14時02分発行